

---

# バラード

柊葉月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バラード

### 【Zコード】

N9112X

### 【作者名】

柊葉月

### 【あらすじ】

松田奈々、25歳。「ごく普通の〇〇」。初恋が甘く切な過ぎて忘れられない。その所為で新しい恋に臆病。

上司との恋が始まりそうな時、再会した初恋の彼。

抱きしめて欲しいと  
甘えたいと

気持ちに正直になれない大人のじれったい恋模様をどうぞ…

## 夢現

んツ  
…

A M 6 : 0 4  
…

ベッドサイドの田覚まし時計に、ボーッとしながら視線を向けて、もう一度、田を瞑る。

だって、今日は、休日の土曜日。

予定の無い土曜日。

夢と現実の狭間を彷徨う思考をそのままに、今しがた見た夢を浮かべ自然と上がる口角はそれがあまりに甘くて幸せな想い出の一部分だった為。

切なくて苦しい部分は一つも…

胸の奥がキュッと音を立ててその夢影をもう一度…と願いながら。

夢の中の私はあの頃のままの私で。

紺色のセーラー服

そんな私の隣には、学ラン姿の彼がいた。

真っ赤な顔して手なんか繋いで、懐かしい道を歩いていた。

季節は秋。

高校三年生の秋。

夕暮れの道。

「お前、東京行くから、俺も大学東京へ行くわ。お前と離れるんやつぱ耐えられへん（笑）」

「カツと笑つてちょっとおどけて言つ彼に、「…え？」なんて言葉を向ける。

東京の短大へと進路がほぼ決まってる私と、地元に残る彼とは、違う未来が待ってると思っていたから。

現実、彼がこの土地を離れて東京に行くことは不可能だとわかつていたから。

彼には複雑な家庭の事情があつたこの時、幼いながらにも一緒に進学できるなんて夢にも思つていなかつたから彼からの言葉に私は驚いた。

「ん、だつて、離れたないし、お前と。

「離れたらお前のこと他の男に取られそりで、嫌や（笑）」

そんなに言葉数の多くない彼が軽口を言つからいつもと違つ感じがした。

いつも彼より少し寂しそうに感じた。  
言葉は嬉しいのに。

「…なんかあつた…の？」

「なーんもねえよ。

…一緒に東京行くの、嫌なん?お前」

そうついつて私の顔を覗き込んだ彼の瞳がやつぱり寂しそうに思えてならなかた。

それが凄く切なくて、そつと彼の背中を抱きしめた。

「奈々…、東京一緒に行こうな。」

「…ん。

でも、瑛斗、大丈夫…?」

「…、な、にが?」

戸惑うような

不安を見せつけるような彼の声に胸がギュウッと締めつけられた。

「でも…、家…の、方は、大丈夫…?」

お母さんと一人暮らしの彼。

何かとお金がかかる野球を小学生の時から続けさせてくれてるお母さんに、言葉には出でなくとも感謝して労わっている彼を私は知っていたから。

そんなお母さんを置いて東京へなんて、彼らしくないと思った。

「ああ…。

大丈夫なんじゃねーの?男と一緒に暮らすんだってさ。」

どこか突き放すような声が、瑛斗の心境を物語っているのかも知れ

ない。

けど、まさか。

突然の話に私も頭の中が真っ白になつた。

え…?

瑛斗のお母さん…が?

「…結婚するの? おばさん。」

口にしてもまだ、どこか遠い話のような気がして、私を抱きしめる腕の力が強くなつた。

「…みたい。

俺、知らへんかつたし、オカソに男居るとかさ。  
結構金持ちの男みたいやから、俺、東京の大学行きてえなんて言つたら、満面の笑顔でさあ、全力で応援するから頑張れだとさ。  
結局、俺の事、邪魔なんやろ?  
キモイわ、あいつら。

あの年でこちやこくなちゅうーの。」

軽口風な瑛斗の言葉が寂しくて、でも、上手い言葉が見つからなくて私は瑛斗の広い背中をギュッと抱きしめた。

私、大好きだから。

瑛斗のこと大好きだから。

初めて自分より大事だと思った人だから。

誰よりも大好きだと

愛しいと思えた人だから。

切なくて

苦しくて

伝わる寂しさに涙が零れそうになった。

「ずっと、お前は俺の傍に…居てな？」

言葉の深い意味をこの時はわからなかつた。

遠い昔の私も、夢の中の私もわかつていなかつた。

ただ、嬉しいと、彼の中の寂しさを見つめないで17歳の私は、この彼の言葉の甘さだけに心の底から、幸せを感じた。

切なさや苦しさに気付いてるのに、それが何なのかわからずに出…。

大人になつた今の私には、少しは瑛斗の言葉の重さを理解することが出来るけれど、今となつては、それは遠い記憶の甘酸っぱい想い出…。

「同じ大学には行けねえけど、頑張んねえとな。お前と同じ街にされるんは、すんげえ嬉しいし、俺。」

「うん。

学校、違うつの寂しいけどね（笑）。

「あは、マジ、無理やろ？

俺、決めた志望校、W大だし、お前短大だし（笑）。

しかも、お前の短大女ばっかりやろ？

それにさ、お前は指定校推薦でもうだいたい決まってつから大丈夫やけどさ、俺、これからやで？  
俺だけ落ちるとか、シケル……」

「（笑）。

大丈夫やつて。

瑛斗、野球してんのに、びっくりするくらい成績良いもん。

絶対大丈夫。」

瑛斗、頭良いもん、しかも、超努力家だし。  
きっと、目指す難関校も合格するよ。

「お前と一緒に街、行けると思ったら、死ぬ気で頑張れるから、俺。

」

「（笑）。」

私の肩に顔を埋めて照れ臭そうに恥ぐ彼が愛しくて背中こまわした手をゆっくり動かした。

伝わりますよつこ

この愛しい気持ちがこいつぱに伝わりますよつこ

「ずっと、一緒にからな、俺ら。」

「…うん。」

そつと、添えられた肩に置かれた手。

近づいた少し瞼を伏せた綺麗な顔にドキンと胸が高鳴って、重ねられた唇の熱さに溶けてしまったと思つた。

そこで覚めた夢は、あまりに甘くて幸せで切なかつた。

あの時

あんなこと…

悲しい記憶が甦つて来そうで私は頭を振つた。

そして、甘い記憶を頭の隅つこから引っ張り出して、幸せな初恋を思い出さうことにした。

## 初恋

大好きだった。

信じられないほど大好きだった。

一生一緒になんて真剣に思った初恋。

硬式野球部のエースピッチャーだった瑛斗。

私の初恋の人。

出逢った時からずっと坊主頭だった彼も、高校三年の夏の大会で引退後、髪を伸ばし始めて、夢の中の彼は、そんな時代の彼だった。もともと綺麗な顔してた彼は、髪を伸ばし始めたら、泥臭さが抜けどこか垢抜けちゃって、新しいトキメキを覚えたのを夢の中の私も感じていた。

シンクロする、現実のあの頃のトキメキと、今、夢の中で感じたトキメキ。

繋がれた大きな手。

ゴツイ掌は、野球を一生懸命した証。

大好きだった。

真っ黒に日焼けした顔に真っ白な歯を見せて笑う姿が。

学校から自転車で30分。

二人乗りした自転車。

向かつた夕焼けの海岸。

防波堤の突端まで歩いて、そつと抱き寄せられた時の胸の高鳴る鼓動  
あの頃感じた胸をときめかせる大きな拍動が今も鮮明に思い出され  
る。

ドキドキした。

ドキドキする。

そつと肩に置かれた手の暖かさと、カラダに駆け巡った熱。  
触れた彼の唇の感触。

それをリアルに今も覚えていて、初めてのキスの甘さも切なさも綺麗な想い出として私の中にある。

私の青春時代は、今朝見た夢の中、現れた彼・香坂瑛斗一色だった。

「…付き合って欲しいんやけど…」

校舎の渡り廊下。

呼び出されて、言葉少なに瑛斗に告白された時、夢かと思った。

野球がとても上手くて、そんなに強くなかった私達の高校を強豪チーム顔負けのチームにひっぱつたピッチャーは、ちょっと有名人。あの頃の瑛斗は、寡黙で、冷静沈着な雰囲気、それに坊主頭に細い眉が厳しいちょっと怖そうな男の子だった。

でも、野球をしてるわりに細身で、切れ長の一重が印象的な綺麗な顔立ちをしてる彼は、女子に凄く人気があった。

そんな目立つ彼は、やっぱり学校の中でも、目立つグループに居た。かつこいい子だらけのグループ。

その中でもクールな彼は、どこか特別で、女子が声をかける雰囲気があまりない冷たそうな人だった。

仲間以外寄せ付けない、そして誰にも媚びないどこか孤高の人つて感じだった。

それが余計にカッコよく見えたりした。

それに、そのグループの近くに居る女の子達も華やかな人ばかりだったから、とても私が近付ける場所じゃないことだけは確かだった。

クールで無口な彼なのに、ふと見せる笑顔が可愛くて、その彼の優しさを知った時私は恋に落ちた。

……

あの日、あの場所で、あんなことが無ければきっと、恋に落ちることも無かつた。

瑛斗のことをまだ、香坂君と呼んでいたあの頃。  
瑛斗の優しさと、可愛い笑顔に私は…、恋をした。

……

「あんた、美術部の部室から、いつも野球部見てるやろ？  
キモいんやけど。」

いきなり発せられた言葉に私は、ただ、驚いた。

確かに私は美術部で、部室から良くなぐランドを眺めていた。  
あまりスポーツが得意じゃなかつた私は、野球部だけじゃなくて、  
他の運動部のヒト達を憧れを込めて見ていた。

いつも風景画や静物画ばかり描いていた私は、今度はその憧れも込  
めて、躍动感たっぷりの人の動きを絵に起こしたいと思つた。  
だから、グラウンドの中を見下ろす様にジッと見ていたのが、彼女  
達、野球部の女子マネ達の癪に障つたのかな…。

なんて思つてはいるが、声色を低くした女子マネの中でも一番可愛い  
と噂の渡辺先輩の声が私を震わせた。

渡辺まゆ先輩は、私より一つ上で、学校でも目立つ存在の人だつた  
から、私も顔と名前ぐらいは知つていた。

煌びやかでどこかゴージャス感がある渡辺先輩に凄まれて私は、恐  
怖感いっぱいになつた。

そんな私に先輩は言葉を繋げた。

「人の男にちよつかい出すな。可愛ごぶつてキモイ。」

人の男？  
つて、何？

意味わからなくて混乱している私に、渡辺先輩と同じジャージ姿だ  
からきっと、先輩と同じ野球部の女子マネ仲間の人たちが私にキツ

イ言葉を投げつける。

「ちょっと可愛いからって、ええ気になんなよ。」

「ムカつくじや、クソ女。」

「消えろよ。ちゅーか、死ねば？」

辛辣な言葉が続くけど、私は、何が起こってるのか理解できないまま、ただ、罵倒され続けた。

一年の二学期。

少し肌寒くなつてきた11月。

勝手な勘違いで、逆恨みされた私は、二年生の先輩二人に呼び出されて、やるせなさを噛みしめていた。

ジャージ姿の先輩は、野球部の女子マネ。

意味わかんないのに、凄まれて、私は、スカートをギュッと握りしめて震えるだけだった。

先輩の一人の彼に私がちょっとかい出したとか、全く身に覚えのないそれに、私は返す言葉も見当たらなくて、ただ俯くだけだった。今思えば、弱過ぎる自分に歯痒い一場面なんだけど、あの時は、ただ、怖いだけだった。

「<sup>ゆずる</sup>譲は、ウチの彼氏なんよ。

なんで、一年の何の接点もないお前に取られやなあかんの。」

譲つて誰なん?

取られる?

なんのこと?

そつ思ひの元、上手く言葉が出ない私は、ただ、俯いて震えるだけ。

「井坂くんも、こんなしょもない女のどこがええんやろ？  
つてか、口無いん？なんか、言えや。」

井坂君って誰なん？

知らんし、そんな人‥。

口無いとか、言われても、何言えばいいのかわかんない‥。

俯くだけで何も言わない私に苛立つた先輩が、私の肩を突き飛ばした。

そのはすみで尻もちをついた私に、「これでも喰らえよ。」と、笑つた時、傍にあつた水道の蛇口を捻つて、ホースから私に水を放つた。

直撃‥

する‥

そう思つて田をつぶつたのに、私に降る水飛沫はささやかなもので、恐る恐る田を開くと、蛇口を締めて、先輩の手からホースを取りあげた白い野球部の練習着姿の彼が、居た。

「香坂……な、んで？」

女子マネの一人がまずいつて感じで、彼を見た。

そんな女子マネを睨むように、香坂君が淡々と言葉を発した。

「何してんの？」

さつきから見てたけど、やり過ぎやろ？

そんなんやから、井坂先輩にフリられるんやうんですか？渡辺先輩。

」

「ツク……」の女が悪いんやん。」

そう言つて私をグッと睨みつけてきた先輩の顔が怖くて私はまた、俯いた。

「こいつ、なんも悪いやん。

井坂先輩が勝手にコイツの事、好きになつたんぢやうんか？

それに、こいつ、井坂先輩の存在も知らんと思つた。

お前、“井坂譲”って知つてる？

と、香坂君が私を見た。

その瞳が優しくて、私は静かに頭を横に振った。

そして、やつと言葉が口を吐いた。

「私、井坂：先輩とか、全然知らん…じ。それに、グランド見てたんは、運動音痴の私にとつたら、運動部の皆が憧れで、眺めてだけです。

「誰を見てたとか、無いです。」

そう言えた時、少し気持ちが穏やかになれた。

香坂君の優しい瞳が私に勇気をくれた気がした。

「なあ、渡辺先輩達、こんなことシてんのばれたら、余計ヤバいと思ひますけど。

それに、俺、コイツの事、同じクラスやし知つてるけど、人の男取るとかそんな高度な技術無いっすよ？

つてか、ほんま、…まじ、ムカつくんやけど。  
あんたら、コイツに、謝れよ。」

言葉尻が急に敬語じゃなくなつた香坂君の言葉が凄くキツク感じた。  
そんな香坂君に先輩達が怯んだように一歩下がつたのが見えた。

「…松田さん、『、めん。』

先輩がチラッと私を見て、そつ言つた。

そして、「香坂、譲に、言わんといてくれる？」と、震える声で聞いたのが聞こえた。

それに、香坂君は、「コイツに金輪際こんなことせーへんかつたら、言わんでもないですよ。」と、少し意地悪く答えたのに驚いた。  
香坂君を見上げた私に、片眉を上げて、「先輩達のシたこと間違つてるんは、わかつといてください。」と、言葉を締めくくつた。  
そして、私の腕を掴んだ香坂君が、「着替えに行こ。」と、校舎の中へと私を歩かせた。

「そ、そんなに水かかつてへんから、大丈夫、やで？」

そう言つ私に無言のまま、香坂君は、私達の1・B組の教室に連れてきた。

「お前、体操服持つてるなんか？」

ドアを閉めた香坂君が私の腕を話して聞いてきた。

「…持つてないけど、ホントに大丈夫やから。  
ありがと、ね。練習の途中やつたん違うん? 戻つてよ?」

これ以上迷惑掛けられない気持ちと、なんか恥ずかしい気持ちに塗  
れて声が上擦つた。

そんな私にお構いなしに香坂君が、自分の置きっぱなしにしてた雰  
囲気のバッグから、紺色の服を取り出した。  
そして、それを私に手渡してきた。

「これ。あんま綺麗違うけど、臭くは無いはずやから。  
制服の上に着ろよ。

ちょっとは、寒くなくなるやろ?」

ニカツと笑つた少しばにかんだ笑顔に胸がドキドキ大きく鳴り始め  
た。

あまり笑顔なんて見せないから、余計にその屈託ない笑顔に胸が高  
鳴つた。

「ほら、早く着ろよ。

お前、鞄、美術室か?」

「あ、え、…うん。」

「外、暗くなる前に帰れよ。」

私は、ブカブカな学校指定の体操服じやないじやない、多分、野球  
部の人気が着るウインドブレーカーとかいうそれをセーラー服の上か

ら着た。

「うわ、ブカブカやな（笑）。  
でも、寒いよりマシやろ？」「…

「うん。  
ありがとう。」

「お前つて、電車通学違つよな？」「…

「へ・うん。」「…

「徒歩？」

「へ・うん。」「…

そう答えた私にまた、一カツと笑つた香坂君が、頷いた。「うん、  
ほんなら、その格好でも、恥ずかしないやろ？」「…

……  
きつと、これが私が瑛斗に恋に落ちた瞬間。

初めて男の子に感じたときめきや胸の高鳴りを恋だと認識するのに  
少しだけ時間がかかったけど、彼の肩に女の子が触れたのを見た時、  
私の胸はチクンと痛んだ。

触らないで…

そう思つた。

それを嫉妬だと認めた時、私は、彼を好きだといふことが認めざるを得なかつた。

でも認めたら案外楽なもので、私は恋することに幸せを感じた。

大好き…

大好きな人。

でも、彼と私は接点は同じクラスってだけだし、目立ち過ぎるくらい目立つ彼と、地味な私とでは、存在自体が違い過ぎるから、私は見てるだけで良いと思っていた。

あの時、たまたま通りかかった香坂君が私を助けてくれた偶然に感謝しなきや、あのひと時が私の全てだったから。

それに、あれ以来話すことないほとんどの私と香坂君だったから。

だから、決して気付かれることない私の片想いだと思っていた。なのに…

## アルバム

「一年なつて、クラス離れたから…。言わな、あかんと思つて…。  
ずっと、好きやつたんよ、俺、松田さんのこと。」

照れ臭そうに首の後ろを搔く彼の耳が赤くなつてゐるのに気付いて、  
私は、体中の熱が顔に集中しちゃつたじゃないかつてくらい顔に火  
照りを感じた。

彼も真つ赤。  
わたしはもつと真つ赤。

そんな校舎四階の渡り廊下。

春の日差しは柔らかで、優しくて、渡り廊下から少し見える桜の木  
の縁が私の中にずっとある。

「あたしも…、香坂くんのこと、ずっと…す、き…でした。」

あの日から、ずっと…

告げるはずの無かつた私の気持ち。

そう答えた私にすこしだけ驚いたように、俯いていた顔をぱつと上  
げた彼が「ま、じ?」なんて言つから、私はただただ、首をゆつく  
り縦に動かした。

「めっちゃ、緊張したし…。」

そつとつて、その場にしゃがみこんだ彼を私も夢心地のまま見下ろ  
した。

腕で抱えた膝の中から顔を上げた彼が私を見上げた。

「…じゃあ、今から、俺の彼女つひひーとで…、よろしくお願ひします。」

「…」ソーランじゆく、お願いします…」

初めての彼。

初めて手を繋いだ。

初めてキスした。

初めて触れた。

初めて自分の全てに触れられた。  
私の初めてを全部捧げた人…

大好きだった。

精一杯愛した。

多分、愛されてた…。

結局、幼かつた私たちは、それを上手く窺むことは出来なかつたけど。

だから想い出。

全力で恋した初恋は20歳の時に呆氣なく終わっちゃつたけど、私にとつて切ないお終いだったけど、見る夢はいつも暖かくて優しいから、忘れられない。

こんな夢を見た所為なのか、夢現の私は、一瞬、あの頃覚えた瑛斗の優しい匂いを感じた気がした。

あの頃、瑛斗愛用の制汗剤と瑛斗の匂いが混じったそれが大好きだった。

瑛斗、今、どうしてるのかな？

二十歳で別れてから、逢っていない、大好きなひと。

あの頃気付いてあげれなかつた深いところの瑛斗の寂しさを今の私なら、きっと、わかつてあげられたのに…。なんて、思う私は、きっと、まだ、想い出の中の瑛斗を想つてゐる。

私からさよならしたくせにね…。

今も、こづしてたまに私を切なくさせら、…忘れられないひと。

眠氣を纏つたまま覺醒しない私は素直に自分の気持ちを認める。

まだ、好き?  
うん、まだ好き。

それは即答。

他の人じや無理?  
ううん、それはない。

現にあれからも、それなりに恋をした。

そのときは、瑛斗のことは遠い過去の想い出になっていたのは確か。なのに、ふとした瞬間、思い出すのは、瑛斗。たくさん恋をした訳じやないから、それぞれの恋を、色々確かに覚えていっているのに。

思い出すのも、夢に現れるのも瑛斗だけ。

それだけ私の中に鮮烈にある瑛斗との想い出。

きつと、一生甘くて切ない初恋は私の中から消えることなんてないんだううな、と思つ。

「… わて、起きよつつかな。」

ベッドの中大きく伸びをして、田を覚ます。

「掃除、しなきやな。」

昨日、美夏が見たいなんて言うから。

あんなアルバム出したの間違いだつたよ…。  
だから、夢見たんだよ…、もう、、、」

昨日の夜、会社<sup>かいしゃ</sup>帰り誘われるまま飲みに行つた流れで、ウチに寄つた友達柏木<sup>かじわぎみか</sup>美夏<sup>みか</sup>が、「奈々の高校時代見せてよ。卒アルあるでしょ? 出してよ。あんた、随分素敵な恋したみたいだし。」なんて、急に言いだすから、クローゼットの奥から、引っ張り出した高校の卒業アルバム。

なんとなく話した高校時代の恋。

美夏に話すのは初めてだった。

ううん、高校時代の友達以外で瑛斗とのことを話したのは、美夏が初めて。

ただ、たまたま付けたテレビの中、映つた映像が初々しい初恋の話しだつたから、自然とそういう向きの話になつて、話しただけ。そんな私の話に美夏は「キュンつてしまふね。私はそんな恋したことないよ。」なんて、必要以上に喰いついてしまつた。  
それで前述のアルバムに行きついたんだけど。

「カッコいい子だね。

奈々の初彼。」

「…うん。

すげーつくカッコ良かつた(笑)。」

「(笑) 言つねえ。で?.. 今も、好き?..」

「…だね。

でも、想い出だよ。」

「…す」ぐこい想い出、か。」

「大好きだつたからね…、私（笑）。」

そう言つて笑つた私を見て美夏が目を細めた。

「私も、奈々のその頃の想い出に一緒に居たかつたな。」

「（笑）なーに言つてんだか。」

「だつて、私、めっちゃ奈々のこと好きだもーん（笑）。だから、私の知らない想い出いつぱいなんて、ちょっと妬けちゃう（笑）。」

そう言いながら綺麗に笑う美夏。

「結城さん、聞いたら泣いちゃうよ（笑）。」

「ふん、あんな男どーでもいいつづりの。」

美夏は、今の会社の同期で、一番の友達。

さばさばしてて、はつきり物事を言つ美夏は、最初正直苦手だと思つた。

四大卒の美夏と短大卒の私は、その時点で年齢も違つし、色んな差があつた所為もあるんだけど。

だけど、新人研修の時、ふとしたきつかけで仲良くなつた。

それからは、男性顔負けの仕事をこなす美夏と、そんな仕事の補佐の私とじや、色々格差はあるし、それこそ仕事の内容なんて全然違うけど、大の仲良し。

モデル顔負けのスタイルに、勝氣で一見冷たそうにも見えちゃう位美人さんな美夏と、おつとりしてて何の取り柄もない普通な私が仲良しなのも傍目には不思議だと思うけど、一緒に居て一番楽で、一

一番信頼できる美夏は、きっと、私の親友。

そんな美夏が、最近付き合いだした年上の彼と喧嘩したなんて言つから、愚痴でも聞いてあげようなんて誘われるまま自棄飲みに付き合つてあげたのは、いつもの流れ…、つて言つてもこの年上の彼・結城さんとのことでは初めてだったけど（美夏は恋多き女だから（笑）ね）。

そのままウチに泊まるなんて言いだした美夏にちょっとだけ溜息が出たけど、これまたいつもの事と、仕方ないと招いたのに。イイだけ彼氏の愚痴を言って、私の想い出を広げっぱなしのまま、深夜かかつて来た結城さんからの電話にしつぽを振つて帰つて行つた美夏は、アルバムも飲みかけのチューハイも全部そのまま。

「今度、美夏にいっぱい愚痴つてやる…。

部屋中お酒臭いし、散らかっちゃつてるし。

アルバムこんなページで開つけばなしなんて、もう…。切ない気持ちになつちゃつたじゃんか。」

広げられたままになつた卒業アルバム。  
最近聞くこともなつかつたそれは、また、私に胸がキューッと音を立てるほど痛みを誘つた。

そこには、瑛斗が野球部のユニフォームで友達とハイタッチしてゐ姿が映つていた。

忘れられないこの光景。

最後の夏の大会地区予選。

準々決勝での、瑛斗。

このハイタッチは、ホームランを打つた瑛斗が、ホームベースを踏んだ時のモノ。

泣いちゃつたんだよね、私。

嬉しくて、感動して。

「瑛斗、最高にカッコ良かつたな…

…、あー、もう…。

想い出に浸るのやめよーっと。」

パタンとアルバムを閉じて独り言を呟いた私は、窓を開けて朝の空  
気を胸いっぱい吸い込んだ。

窓を開けて空を眺めた。

遠い過去が行き来する今朝は、自棄に切ない気持ちが込み上げて来てダメ。

大好きだったな…

でも…

やつぱり占領し始めてた記憶の欠片が私を苦しくさせるのに、溢れだした想い出が私をいつぱいにして行った。

瑛斗との恋は、あやふやなまま二十歳の夏に終わりを告げた。

瑛斗のことを信じ切れなかつた私の所為…

でも、あの時、疑心暗鬼が私の中で確実なものになつて、瑛斗の彼女でいることが心底疲れた。

だから、自分の決断に後悔は少しだけ…のはずなんだけど。

「もう、無理だよ。

瑛斗の言つこと、全部嘘に聞こえる。

別れよ。」

そう告げたあの時の瑛斗の苦しそうに歪んだ表情を思い出すのが嫌でカラダが拒絶する。だから、今もそれが現れそうになる時、私の脳は一気に靄がかかつたようになる。

なのに、瑛斗に言つた言葉や、その時の風景は鮮明に浮かぶ。

あの日は日曜日。

何となく突然訪れた瑛斗の部屋。  
お昼前だつたから、パスタでも作ろうかと、その材料を抱えて、渡されていた部屋の鍵でドアを開けた時、目に入つたそれに私は、一瞬で心が真っ暗になつた。

鮮明に思い出せる。

玄関先に並べられた、瑛斗の黒いスニーカーと、パールのイミテーシヨンが施された私のじやない白い華奢なミュールを見つめた。

楓さん… の。

瑛斗のゼミの仲間。

それがいつもの瑛斗の言葉だった。

でも私は気付いていた。

女の勘つてやつ。

十中八九当たつちゃうあれ…。

瑛斗がゼミの仲間を私に紹介してくれた時、その中に楓さんがいた。私達より一つ年上だけど、学年は一緒だと言つていた。

優しい言葉とは裏腹に明らかに私に向けられる瞳は、敵意満載だったから、私は苦手だと思った。

絶対に瑛斗に好意を抱いている楓さんなのに、瑛斗はまるつきりそれに気付かない態度で接するから、心がざわついた。

それにきっとあの頃、瑛斗は私より、彼女と過ごす時間が多かつたと思う。

瑛斗は、自分にあからさまな好意を抱く女の子には、すぐ警戒して敬遠するけど、仲間だと思っている彼女には、あらゆる面で許容

範囲が広かつた。

それにやきもきするのに、それを告げて嫌われるのが怖かつた私は  
それがある意味黙認していた。

それがあざとなつた。

玄関先のモノ音に気付いたのか、瑛斗が寝ぐせの付いた髪をガシガシ搔き鳶りながら、「なんか、忘れモン?」なんて、意味不明な言葉を発しながら半分閉じたままの目をこちらに向けた。  
一瞬で見開かれる瞳が、私を余計に苦しくさせた。

「え、あ、…奈々? ビ、した?」

なんで焦るの?  
焦る必要があるの?

言葉を発しない私に瑛斗の視線が足元に向かつて、小さい声で、  
ヤベッ…って言つたのが聞こえた。

ああ、お終い。

私は、瑛斗の言葉も待たずにしてドアを閉めた。  
そして、思いつきり走つた。

逃げ出した。

苦しくて  
悲しくて  
悔しくて…

手に持つたままのスーパーの袋を抱きしめた。

「ひよ、待てよ。」

グッと掴まれた腕。

瑛斗の声。

整わない呼吸をそのままに私は、瑛斗の腕を振り払った。

「触らないで。」

怖いくらい冷静な声が出た。

そんな自分に自分自身が驚いた。

涙もない。

「聞けよ。

昨日、ゼミの流れで、飲みに行って、楓が飲み過ぎちゃったから、仕方なく俺の家に連れてきただけだから。

なんも、ねえ。

マジ、なんもねえから。

それに雑魚寝なんて、たいしたことねえじやん。」

瑛斗が連れて来なきゃなんない理由がわかんない。

雑魚寝？

ふたりつきりで？

「瑛斗にとつてはたいしたことじゃなくて、私は、無理だから。」

「やましこじシたわけじゃねえのに、何が無理なんだよ。俺が好きなのは、お前だけなんだよ？」

「もつと、信じてよ。」

いつもカツコいい瑛斗が眉を八の字に下げた。

少し困ったその時折見せる可憐いこの仕草が好きだったのに、この時は、それすら嫌だと思った。

涙も出なかつた。

瑛斗の言い訳なんて聞きたくないと心が拒絶したから。

「…もう、いいから。

私、瑛斗の言葉全部、嘘に聞こえる。」

「は？」

「嘘に聞こえちゃうの。

楓さん、瑛斗のこと好きなんだよ。

なんで、そんな人、家に泊めたりするの？  
あの人、私に向ける目、怖いもん。」

「はあ…。

冷静になれよ。

楓が俺を好きなんてお前の思い過げ…」

大きな溜息の後、呆れたように言葉を繋いだ瑛斗を遮つて、私は、別れを告げた。

「もう、いいよ。

何を話しても、きつと、ダメだよ。

私、無理だよ。

瑛斗の言つこと、全部嘘に聞こえる。  
別れよ。」

瑛斗の顔が一瞬で歪んだ。

私はそれを見たくなくて、俯いた。

「お前、それ、マジで言つてんの？」

低くぐぐもつた声は初めて聞くものだった。

「うん。私、瑛斗の傍にいるの疲れちゃったよ。」

そう答えた私に瑛斗は、もう何も言わなかった。

そして、私の前から、踵を返した。

呆気ない終わり。

きっと、私の存在はこの時点で、この程度のモノだったんだ。

希薄になつた二人の関係をまざまざと見せつけられた。

それを感じながら、私も、その場を後にした。

背中に背中を向けて…

呆気ない終わり。

歩きながら、瑛斗のアドレスを削除した。

削除した途端溢れだした涙に自分自身呆れた。

あの頃、就職活動で忙しい私と、大学二年の瑛斗では、どこか歯車が噛み合つていなかつた。

時間も、友達も、全部が。

でも、それでも瑛斗は、私との時間を作ってくれようとしたのに、私は、バイトに、就職活動にと瑛斗の努力に気付けづずにいた。

それより、瑛斗からの電話の向こうから聞こえる彼女の笑い声が無性に苛立つたりして、早く電話を切りたいなんて思つてしまつ。

「明日、久しぶりに飯食いにいかね？俺、バイト代出たんだわ。」

「…明日は、バイト入ってる…」

「そつか、バイトじや、しかたねーよな。」

「うん、ごめんね。週明けならバイトも休み取れるよ？」

「あ、俺、週明けは、予定入ってるわ。」

「…そつか…。」

私の気持ちを労わってくれない…。

不平不満がいっぱいの醜い私の心を瑛斗に見せる訳にはいかないから、私は、必然と言葉少なになっていた。

お互に思いやれるほど自分達に余裕もなかつた私と瑛斗は、お互いに一人の関係に歪があることに気付かないで居たのかもしれない。

切ない記憶は、何故か瑛斗の顔がいつも曖昧。

なのに、その時の言葉、風景や光景は恐ろしいほどリアルに覚えていて、今も私の中にある。

それを思い出すたびやつぱり苦しくて切ないのは、まだ、それを引き摺つたままだから。

だつて、仕方ないでしょ？

あんなに恋して  
あんなに愛して

あんなに大切だつた初恋。

全部が瑛斗一色だつた私の青春。

在り来たりな別れだつた。

瑛斗からのさよならを聞かないまま。

連絡を取ろうと思えば取る手段なんてたくさんあつたのに、それをしなかつた瑛斗が答えだつた。

自分からさよならしたのに。

ずっと、失恋した気分の私は、傷心のまま。

大好き過ぎて潰れちゃつた私の初恋を思い出したこの日、私は、新たな恋を知ることになつた。

## 突然

改めて自己紹介。

こんな想い出を今も少しだけ引き摺る私、松田奈々（まつだなな）、25歳。

短大卒業後、この就職難の時代、ビルにか一部上場企業の営業補佐の事務職に就いて5年目。

仕事は色々大変だけど、もともと前へ出る性格じゃない私は、この補佐と言つ仕事にやりがいを見いだせていた。

仕事もあってそれなりに生活していく上で困らないほどの収入もあるし、美夏みたいな素敵な友達も居る。

こんな毎日は、充実して過ごせていると思つんだけど、今朝みたいな夢見ちゃった日は、ちょっとだけ胸がキュッと締めつけられて、切なくなる。

恋人がいたらもつと、違うのかもしれないんだけど。

私は、瑛斗との恋以来、男運がつていつか、恋愛運がさっぱりだと自負している。

短大の時は瑛斗を引き摺つたままで、恋なんて出来なかつた。OLSになつて、美夏に誘われるまま何度も行つた合コンも軽く付きあつたり出来ない私にはどうも向いていないみたいだつた。

優しくしてくれる男の人に嫌悪感すら抱く自分が嫌になるから、美夏には正直にそれを伝えて合コンには参加しなくなつていた。

「何年、恋していないんだ、私…、枯れちゃつてるよ…。」

なんて一人自嘲気味に呟いて、取り敢えず腹ごしらえと、焼いたトーストにマーガリンを塗つて、氷でいっぱいに満たした大きめのグ

ラスにコーヒーを注いだ。

ステレオを〇〇にして、最近お気に入りの音楽を流して、穏やかな休日の朝を満喫することにした。

窓のカーテンを揺らす風に心地良さを感じて、この穏やかな時間が大切に思えた。だから、まあ、恋人なんて要らないや、と、漠然と思う。

齧つたトーストの焼け方が最高で、もっと、幸せな気持ちになった。

シーツ洗って、布団干して、  
洗濯して、掃除して、

天気の良い休日を満たす計画を巡らせながら、さつきまで頭を占領してた過去を払拭した。

なんか、お腹減ったかも。

取り入れた洗濯ものを畳みながら、磨いたリビングの窓から空を眺めた。

西日が雲を照らして、夕暮れが近いことを教えてくれた。  
お昼ご飯、カップスープだけだったし、お腹空くはずだわ。なんて思いながら、畳み終わったタオルを片づけて、買い物に行こうと財布を手に取った。

予定の無い土曜日は、いつもこのパターン。

掃除を終えて洗濯を畳み終えたら、一週間分の食材を買うために、自転車で5分そこそこで行けるスーパーへ向かう。

近場のスーパーだし、知り合いに会う可能性なんてほとんどないしと、私は、薄手のパークーにジーンズなんて恰好のまんまで、外に出た。

自転車で行く予定だつたけど、何となく、歩いてのんびり行きたいな、なんて思った私は、そのままゆっくりスーパーへの道のりを楽しむことにした。

この場所に越してきて、二年とちょっと。

色々困ったことがあつた前のマンションからここに越してきて、大成功だつた。

縁が多くて、買い物の不便もなく、しかも会社まで、乗り換えなしに行けるここは、最高に住み心地が良い。

今、住んでるマンションは、まだ、新し田だつたし立地条件が良いから、自分の予算よりちょっと家賃が高いのが玉に傷だつたけど、即決した。

この1LDKは私のお城。

单身用の設計の割にキッチンが充実してるし、何より日当たりの良さが大のお気に入り。

少しだけ遠回りして最近発見した美味しいパン屋さんに寄り道した。そこで、食パンを一斤買って、私は足取りも軽くスーパーへと向かつた。

スーパーの駐車場を横切つて店内へと入るうとした時、後ろから声がした。

「松田？」

良く知つた声のよつた気がして、  
でも、こんな場所で？

なんて不審に思いながら、振り向くと、予想通りの人が私に向かつて、小走りに歩み寄つて来た。

「田高主任…え、？なんでこんな場所にいらっしゃるんですか？」

「フツ（笑）、こんな場所つて。俺ん家、この近く。」

へえ。うちと近所なんだ…、知らなかつた。  
仕事以外の話なんてほとんどしたことがないしなあ。  
でも、駅同じなのに、会つたことないな。

色々な疑問が頭の中にいっぱいの私に主任がクスッと笑つた。

「松田も」の近くなの？」

「へ？」

「（笑）へ…つて。  
家、この辺りなの？」

「はい。もうなんですけど。」

「けど…」

聞き返されただけなのに、ビクッとしちゃうのは、上司だからかな。  
どこか高压的に聞こえるそれに怖々になる答え。

「いえ。…主任が「近所だったなんて知らなかつたんで、ちょっと

驚いただけです。」

「一週間前に越してきたばかりだからな、俺。」

「一週間前ですか?」

「そ。まだ、部屋中ダンボールだらけ。」

「そうなんですか…。」

「松田は、こんな場所に何しに来たの?」  
口端を少し上げた主任は、会社での顔と少し違つて、怖いのに優しい感じがした。

「(?)飯の材料買いに来たんです。」

「へえ。

「お前、作れんの?」  
ちょっとバカにした口調。

「自炊7年目ですから。

こっち出て来てからですもん、ちょっとは作れるようになります。」  
口調を強くした私に、ククツと笑った主任が私の至近距離まで近づいた。

「知ってるよ(笑)。」

「いつも毎、弁当食つてるよね?」

「え、はい。」

「ランチ行く子多いのに、ね。」

「んん。バカにされてる? 私。

「だつて、毎日ランチなんて、私には無理、です。（お金が続かな  
いよ…）」

そう答えた私に主任は笑いながら、「松田つて、堅実だもんね。だから、買い物なわけね。俺は、飯作るの面倒だし、食いに行くのも一人だからつまんねえしと思って、飯、買いに来たんだよね。」

また一步私に近づいた主任が意味深に口角を上げた。

近い…  
近過ぎ。

「「」、「飯ですか…」

…あれ?主任、スーツなんだ。  
休日出勤してたのかな?

休日出勤なんてほとんどしたことない私とは凄い違いだ。なんて悠長に思っていると、「すっぴん、可愛いね。」と、私の姿を上から下、下から上へと視線を這わせた主任がフツと笑った。

バカにされてるのに、会社じや見せることのない笑顔に、不覚にもドキッとしてしまった自分に胸中苦笑した。

田高修一、多分30歳くらい。

私が補佐させて貰つてる営業一課渉外担当の主任。  
とにかく冷静沈着、頭脳明晰、それに加えて容姿端麗ときたもんで、

誰でもドキッとしちゃう人だつたりする。

でも、私は正直少し苦手だつたり…。

外見と醸し出す雰囲気が少し瑛斗に似てると思ったことがあつたから。

でも、年上の日高主任はやっぱり瑛斗とは違うし、仕事以外係る人じやなかつたから特別私の中でなんて思つことも無かつた。エリート営業マンそのままの日高主任は、誰に媚びることもなく頼ることもしないどこか冷たさを見せる人だから。

プライベートが垣間見れない人。

取り敢えず、的確簡潔な言葉が辛辣極まりない人、そんな印象の人だった。

取引先には全然違うらしいんだけど。

完璧な営業スマイル（私は見たこともないけど）と、卒無い気配りや誠実な態度に絶大な信頼があるらしい。

その分、仕事には厳しい。

そんなクールな部分が一部の女性社員に人気があるのは周知の事実だつたけど、ちょっと女性蔑視した態度が垣間見られる発言をするから、毛嫌いしてゐる女性社員も多数居るのも私の知つたところだった。

同じ部署に居ても接することもほとんど無かつたから、ちょっと瑛斗に似てカツコいいのに勿体ない人だなくらいにしか思つていなかつた。

（心中では何気に上目線の自分に笑つちゃうけど。）

同じ部署でも係ることもないと思つていた去年の春、そんな人の専属補佐に任命された時、背中に冷たいものが走つた。

今まで、専属補佐なんて付けなかつたのに…。

日高主任の抱えてる案件膨大だから、仕事量半端ないし仕方ないか

なんてどこか他人の事のように思いながらも、厳しいけど仕事の出

…。

来る日高主任の補佐に任命されたという現実を踏まえた私は、頑張んなきや、足引っ張るような補佐になっちゃダメだ、と自分に叱咤激励した。

でも、それは、少し取り越し苦労だったようだ、この一年で知った。確かに仕事には厳しい人だけど、言葉も足らないし優しさなんて目に見えてはないんだけど、余程なことがない限り、定時退社出来るように心配りしてくれることに気付いたり、どうしても同席しなきゃダメな接待の時も、さりげない優しさを私は感じることが出来た。

ホントは良い人なんだと思った。

でも、上司は上司だしそれ以下でもそれ以上でもなかつたのに、今日の雰囲気が少しつつも日高主任と違う気がして、心が異常にざわついた。

「まだ、買い物していないんでしょ？」

そつ言葉を繋げた日高主任が私に少し微笑んだ気がした。

ああ、この顔、ちょっと好きかもなんて思う自分が戒めつつ、「はい、まだですけど。」と、冷静を保つよつてひやり答えた。

「じゃあ、さ、まだ、飯食つてないんだ？」

?

「はい？」

「そこに美味しい居酒屋、最近見付けたんだよね、行こう。」

？？？？

「ほり、行くよ。」

と、決定事項のように私に向かって歩き出した主任の背中を見つめた。

「わらわと歩く。」

呆然としてる私を振り返って、簡潔に言葉を発した主任に私は慌てて歩みを速めた。

す、すっぴんで、こんな恰好なのに…

そう思いながら、突然と出来ごとに頭が付いて行かないまま、主任の後をついて、スーパーからほど近い居酒屋の暖簾を潜った。

「何飲む?  
お前、酒飲めるよね?」

案内されたカウンター席に座るや否や、日高主任が話しかけてきた。

「飲めます、けど、」

「俺、生チュー、で、?」

「あ、あたし、レモンサワーでお願いします。」

カウンターの中のお兄さんが「了解しました。」と、優しく微笑んでくれた。

少し強引な日高主任に、懲りながらも結構居心地の良いお店だな…  
と、思いながら、店内をなんとなく見渡した。  
こじんまりとしたお店なのに、店内は賑わっていて、繁盛してる店  
だと思つた。

「土曜の夜だしな。

お前、食いものの好き嫌いってある?」

目の前に置かれたビールをグイッと半分以上一気に飲み干した主任  
が、私を見た。

うわ、なんかセクシーなんだけど…と、ドギマギする私を余所に主  
任は、残りのビールを飲み干した。

「特に、好き嫌いは無いです。

…けど、日高主任、喉、乾いてたんですか？」

そう聞いた私に主任が一瞬目を大きく開いてそして、空のグラスをカウンターの上に置いた。

「じゃあ、適当に食いもの注文するわ。  
えーと、取り敢えず、“生”もう一個と、…………」

次々と注文する主任の声を聞きながら私は、レモンサワーを一口、口にした。

美味しい…

カウンターに次々と置かれた注文品を田の前に並べながら、主任と一緒に食べてるこの風景が何故か緊張するのに、居心地が悪くないのは、このお店の雰囲気と少し入ったお酒の所為なのかな、と思いながら、揚げだし豆腐を一口大に切り分けて取り皿に取った。

あ、美味しい。

ホントに、このお店の料理美味しいや。

パクパク食べる私に日高主任の柔らかい声が届いた。

「美味そうに食うね。連れて来た甲斐があつたよ。」

「だつて、凄く美味しいんですねもん。」

そう答えながら水菜のサラダにお箸を伸ばした私にカウンターの中

のお兄さんが「最高の褒め言葉、ありがとうございます。奈々ちゃん」と、私を見た。

ん?

奈々ちゃん?

なんで私の名前知ってるの?

ジッヒカウンターの中のお兄さんを見て確認しようとした時、隣から怪訝な声がした。

「知り合?~」

「ええ、同郷ですよ。奈々ちゃん、俺のことが覚えてないん?」

懐かしい故郷の言葉のインтоネーションにカウンターの中の彼を当て嵌めるナビやつぱりピンとこなー。

小洒落た居酒屋に似合ひの風貌の彼。

長めの髪を後ろで束ねて、顎に無精髭がワイルド。切れ長の目。

遊び人風の男前に、私は知り合いなんて居ない。

「わからへんかな…。

まあ、俺、坊主やつたし、奈々ちゃんより一個上やつたし、覚えてないか。

奈々ちゃんは俺らの間で有ねやつたのになあ。  
瑛斗の奈々ちゃん

瑛斗?…。

なんか、今日は瑛斗がたくさん出て来て、気持ちがモヤモヤ…でも、この人、瑛斗の知り合い？

「あ、もうだいぶ前にそうじゃないのにね。今は、瑛斗の奈々ちゃんじゃないのに。」

「ごめんごめん。」

「何…、この人…。」

私は今朝何度も頭に浮かんだ名前をこんな場所でまた何度も聞いて、胸が新たに痛みだした。

踏み込まないで…

私の中に

搔き乱されたくない

私の心を

「奈々、彼、地元の友達なの？」

はじめまして、俺、今奈々と付き合つてゐる、日高です。

俺の前で、昔の男の影匂わすのやめてくれませんか？」

隣に座つてゐる日高主任が、びっくりするような突拍子もない発言をするから俯いていた顔を思いつきり上げて、私は日高主任を見た。

そんな私の頭を大きな手であやす様にポンポンっと撫でた日高主任が、「でも、こここの料理も酒も美味いから、これから贔屓にさせて貰うよ。」と、カウンターの中の彼に微笑んだ。

「あ、はい。よろしくお願ひします。」

「これ、俺の名刺です。」

カウンターの中の彼が、日高主任と私の前に一枚ずつ名刺を置いた。

おしゃれな名刺には、酒食処“柚子流家”店長・井坂譲 と、書かれていた。

名前を見て思い出した。

先輩。

井坂先輩。

瑛斗の一個上の野球部キャプテン。

瑛斗と居る時何度も会つたことはあつたけど、親しく話したりした覚えはほとんどない。

「…井坂先輩？」

そう呟いた私に、「コツと微笑んだ井坂先輩が「そ、まさかこんな場所で会えるとは思わなかつたからちょっと意地悪しちやつたね。でも、奈々ちゃん、幸せそうで良かつたよ。これ、お詫びと、再会にプレゼント。」と、私の前に綺麗なピンク色のカクテル、日高主任の前に薄いグリーンのカクテルを置いた。

「では、じゅくじしていつてくださいね。」

そつ言葉を残して井坂先輩は、私達の前から離れた。

「偉い男前な店長だな…。」

日高主任がぼそつと呟いて、差し出されたカクテルを手に取った。

「そうですね……」

私も薄桃色のカクテルに手を伸ばした。

「お前、田舎つてどーなの?」

「え、つと、和歌山……です。」

「へえ、やうなんだ。」

「田舎主任は、どちら出身なんですか?」

ピンクのカクテルは甘くて喉越しが凄く良くて、飲みやすいやつ  
そうだなと思った。

「俺は、北海道。」

「へえ、いいなあ。」

そう答えた私に田舎主任が不思議そうに顔を覗めた。

「何が?」

「え? だって、いっぱい美味しいものあるじゃないですか。一度、  
友達と旅行に行つたことあるんですけど、最高でした、北海道。」

満面の笑みで答えた私に田舎主任が、小さくため息を吐いて、「友  
達つてやつを言つてた男と?」と、さつきより低い声で聞いて来る。

瑛斗と別れた後だつたよな、あの時。  
まるで尋問されてるような気分に私は、少しだけ冷めた口調で答えた。

「違います。短大の時の友達とです。」

「ふーん。

…さつき、言つたこと事実にしないか? 「

わつわ言つたこと?

「…俺の彼女。」

「へ?

「…お前が俺の彼女つてダメか?」

私が?

日高主任の彼女?

つてどうこうこと?

思考回路停止…

まさにそんな感じ。

降つて湧いたような日高主任の告白に私は、上手い答えを見つからず、ただ、私を見つめる日高主任から目を逸らさずに聞た。

「俺の事好きになればいいんだよ。」

グラスを片手に私を見た日高主任が口角をあげて笑った。

「とぼけた顔してんなよ。

今から、お前は俺の彼女ね？」

訳わかんない…

私が彼女？

「何番田のですか？」

そう聞いた私に日高主任が持っていたグラスをテーブルに音を立てて置いた。

そして、大袈裟に大きくため息を吐いた。

「他に女なんて居ねえ。バカじやねえの？」

バカ？

私が？

「…私を好きなんですか？」

つい頭を過った言葉をそのまま口にしてしまった。

言った後で大後悔：

だって、好きなんですかなんて、高飛車な言葉…。

焦つてる私に日高主任が淡々と答えた言葉に胸が否応なしに踊る。

「ずっと、好きだったよ…。今は、お前以外考えらんねえくらい。」

優しい声色に高鳴る胸の鼓動。

射るような眼差しの強さに苦しげが増える。

「俺のこと、好きになれ…」

好きになる…

好きになれる?

答えられない私の頭をポンッと撫でた日高主任が「俺に縛られてよ。他の男がお前にちょっかい出せないよう」「…」と、微笑んだのに、無意識に頷いた私に、自分自身が驚いた。

なんて田まぐるしい一日…

「ん、じゃ、乾杯しよう。

今日からようひしく、奈々。」

流されるままグラスを合わせた私は、気持ちを整理できないまま、戸惑うばかりだった。

戸惑つ私を意に顧せず、日高主任は、私の携帯と主任の携帯を簡単に赤外線して、私の携帯の中に、日高修一と、登録された。

「電話はなかなか出れないかもしれないけど、いつでも、メールしていいから。俺もするし。」

微笑んだ日高主任に私はやつぱり戸惑つたまま、グラスに口を付けた。

甘くて、仄の酸っぱいお酒をゆっくり飲んだ。美味しいのに、胸が苦しくて味がぼやけた。

…私、日高主任の、彼女になっちゃったのかな…

と、自分の事じやない他人事のように思つてしまつ。

こんな私で良いのかと、たくさんの不安を抱えてグラスに残つたお酒を飲み干した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9112x/>

---

バラード

2011年11月29日22時56分発行